

【 犬と人間、アイコンタクトで親密に 麻布大などが研究 】

犬と人間が互いの目を見つめ合うことで、双方に「愛情ホルモン」であるオキシトシンの分泌が促進されるとの研究論文を麻布大学動物応用科学科の菊水健史氏率いるチームが米科学誌「サイエンス（Science）」に発表しました。

これまでの研究では、母親が赤ちゃんの目を見つめることで、互いにオキシトシン生成が促進され、愛情、保護、親近感などの感情がわき上がることが確認されていました。論文は、犬と人間がアイコンタクトを通じ、信頼と感情面の結びつきを育むオキシトシンの分泌を高め、数千年にわたり共に進化して親密になった可能性を示唆しています。

犬が野生のオオカミから進化して、人に慣れるペットや友達になった理由は、これと同じ仕組みが働いているからだとして研究チームは指摘。「それぞれ犬と人間に最も近い近縁種のオオカミとチンパンジーに比べて、犬は人間の社会的コミュニケーション行動を理解し利用するのが上手だ」と述べています。

研究チームは、犬と飼い主を対象に、語りかけ、触れ合い、見つめ合いなどの交流を30分間にわたり記録する実験を行いました。実験後、犬と飼い主の尿中のオキシトシン濃度を測定した結果「犬と飼い主の間のアイコンタクト回数が増加すると、双方の脳内オキシトシン濃度が上昇した」といいます。

オオカミを使った同じ実験では、犬で観察された結果は得られませんでした。このことは、数千年前に犬がオオカミから進化した中で、家畜化された犬は、人間の社会的コミュニケーションの要を成す「まなざし」の力を身につけることができたことを示唆していると述べています。
